

\*書評と紹介

『新自由主義批判の再構築——企業社会・開発主義・福祉国家』

(赤堀正成・岩佐卓也編著)

『新社会兵庫』2010年11月23日書評者…佐野修吉

新自由主義批判の混乱に一石

貧富の格差の拡大の顕在化やリーマンショックを引き金とした世界的不況（恐慌）などによって、ま



(法律文化社、2010年8月  
3,150円(税込))

た昨年の日米における民主党政権への移行によって、「新自由主義は終焉した」と表現されることが多々あった。しかし、新自由主義を批判していたはずの日本の民主党政権もアメリカのオバマ大統領も、実際にやっていることは、新自由主義的政策をより徹底させるか、装いを変えた代物がほとんどである。

批判する者がそれを実践する。それほど、新自由主義はなかなか明確にとらえきることが難しいもの

だ。とくに、日本においては新自由主義を批判しているようで、実は新自由主義路線を推奨する理論が数多く提起されてきた。

本書は、この「日本における新自由主義批判の混乱」は、日本の「企業社会」と「国家」の特殊性の重視・着目からきているという二つの視座を用いている。すなわち、「企業社会の特殊性」とされる「年功賃金」や「終身雇用」が差別や格差の根源であるとしたり、日本は福祉国家でなく、「開発主義体制」「官僚主導国家」であると主張する。

そこで、本書がまな板に置いたのが、「企業社会」については、①木下武男の「日本人の賃金」、②日経連の「新時代の『日本の経営』」、③八代尚宏の「労働ビッグバン」推進論、④森ます美の『日本の性差別賃金』の検討」であり、「開発主義と福祉国家」については、⑤後藤道夫の「戦後思想ヘゲモニーの終焉と新福祉国家構想」、⑥新田滋の「新自由主義の虚像と実像―デヴィッド・ハーヴェイ『新自由主義』書評論文」などである。

木下武男の『日本人の賃金』は発行とともに注目され、兵庫県下でも同氏の講演会は何回も開催され、私も拝聴した記憶がある。批判されているのは、木下氏の「年功賃金」否定論が、新自由主義労働法制推進の権化というべき八代氏の「労働ビッグバン」とタイアップしているという事実である。「企業社会の特殊性」論への批判は、その点だけでなく、日本の「年功賃金」は企業が労働者に与えたものでなく、労働者が闘いや粘り強い抵抗を通して形成したものであり、「年功賃金」や「終身雇用」を失うことは、「野蛮な労働市場」に全労働者を放逐するという事実に置かれている。また、社会改革の主体として正規職労働者をどう評価するかという問題でもある。

第2の視座、「開発主義と福祉国家」では、後藤氏の「開発主義」論が主な批判対象である。日本を「非福祉国家」と規定するものであり、打破すべき対象が「開発主義的社会保障」とその根源にある「官僚支配」としている問題である。つまり、「政・財・官癒着、自民党の利益誘導政治の打破」といった「開発主義批判」の装いを取りながら、実際には福祉国家を攻撃する野口悠紀雄の「1940年体制論」と軌を一にするものとなっていることである。そして、本当に日本は官僚に支配されているのかという疑問である。

◇  
◇  
私たちの中にもある少なからぬ「混乱」を克服するためにも、ぜひ精読・検証しておきたい著作である。

◇現代労働組合研究会のHPへ（TOP）

<http://e-kyodo.sakura.ne.jp/roudou/11210roudou-index.htm>